

植物園の環境経済史
—京都府立植物園、生物多様性保全の100年—
Environmental Economic History of Botanic Garden
—A 100-year Biodiversity at Kyoto Botanical Gardens—

三俣 延子*
MITSUMATA Nobuko

1. はじめに

絶滅危惧種保全のための基礎的な調査が1980年代から始まってから、植物園は日本の自然環境を保全する施設として大きな役割を担ってきた。しかしながら、そのような活動は植物園関係者以外にはあまり知られておらず、こういった状況から、植物園にかかわる理学・農学などの研究者の間では、植物園施設の社会的認知度の向上も目的として、植物園を問うこと（植物園学）の必要性が継続して訴えられてきた（岩槻2009、松谷2011）。

最近では、日本各地の植物園の変遷を概観し、長期的運営の実現に向けて考察した久保・柴田（2022）、東京や名古屋における公立植物園との関連において京都府立植物園（大典記念京都植物園）の設立の過程を詳述した桜田（2021）などが発表されている。

現在、日本植物園協会に加盟する全国の植物園施設が生物多様性保全の活動を活発に行っている（『植物多様性保全事業年次報告2024』）が、今回の報告では、日本最古の公立植物園である京都府立植物園の歴史をふり返り、これまでの100年間に展開された植物園活動による、日本の自然環境の保全という社会的貢献について明らかにする。

2. 方法

大正4年度から14年度までの『大典記念京都植物園関係一件』などの簿冊約20冊など過去の行政文書や、京都府立植物園が定期的に刊行する1920年代以降の『植物目録』、植物園職員による『日本植物園協会誌』に掲載された論文などを中心とし、それらの植栽の記録にもとづいて、さまざまな年代において展開されてきた栽培・展示植物の内容を各時代の時代背景とともに整理し、その内訳を考察した。

3. 結果

京都府立植物園の計画は、1913年に京都府が博覧会のために左京区上賀茂・下鴨地域に土地を購入したところから始まり、博覧会計画の変更、三井家同族会からの寄付などを経て、1924年1月1日「大典記念京都植物園」として一般有料開園となった。開園時の植栽や開園に至る経緯については、植物園が戦後に連合軍に全面接收された時代もあること

* 同志社大学経済学部嘱託講師 E-mail: sk110733@mail.doshisha.ac.jp

から多くの史料が散逸したと考えられており、不明なことも多かったが、京都府立京都学・歴彩館所蔵の大正年間の行政文書からは開園時の植物園の導入品種の詳細がわかる。

開園に向けて寺崎良策技師が作成した多数の文書や種苗会社・造園業者などの見積書からは、園芸品種の種類が多さが際立つ。例えば、サクラは、関山、御車返し、御衣黄などのサトザクラを中心に60種。光源氏や散姫などツバキは80種。星飛龍、東雲などサザンカは50種。ツツジは久留米ツツジ、江戸紫、霧島、平戸など90種。錦獅子などサツキは30種。菊は一文字、太管、嵯峨菊といった種類別に合計100種などである。多様な品種改良がなされた園芸文化は江戸時代の終焉とともに荒廃したといわれるが、そのような時代において、植物園が設立される前年に組織された京都園芸倶楽部とともに当時の大典記念京都植物園が日本古来の園芸植物の「種内の多様性」を保全することに貢献したことは明らかである。

その後、1946年に駐留アメリカ軍の住宅地として接収され、樹木の7割以上が伐採された植物園は、蜷川虎三知事が返還交渉に尽力し、1961年に再開園を果たす。当時の麓次郎園長の発案により京都府政100年記念事業のひとつとして着手された「日本の森」の造成計画では、科学の発達によって破壊された自然を鑑み、「自然保護がいかに大切なものであるか」という教育・啓蒙までが目的とされた。したがって、「日本の森」の中核をなす植物生態園は、北方系から京都周辺の山野草も集めた中部関西系さらに南方系、湿地や水路まで配して水生植物も取り入れるなど日本列島の縮図として構成された。これは、「生態系の多様性」を実現させた展示エリアと言え、1971年の完成から50年以上となった現在は、希少となった日本の固有種が残存する自然林を形成し、その役割はいっそう高まっている。

1990年代から、日本、特に京都府周辺で絶滅危惧種となっている野生植物の収集・保存・増殖という役割を担っており、植物生態園以外にも絶滅危惧種園が新設され、バックヤードも含めた園内に約300種を植栽する域外保全施設である。日本植物園協会の地域野生植物保全拠点園、また、ラン科、カンアオイ属、ホトトギス属の特定植物保全拠点園であり、種の保全に関連して、アマミアセビ・リュウキュウアセビ、野生のハスがナショナルコレクションに認定されている。各地の植物園や自生地域とのネットワークを形成しながら「種の多様性」を保証する施設となっている。

4. 結論

京都府立植物園は、生物多様性保全が気候変動対策と対をなす世界的に重要な政策的課題として具体化されてきた現在のみならず、歴史的にも、さまざまな時代において「種内の多様性」「生態系の多様性」「種の多様性」を保全する施設として環境保全的な役割を担ってきた。また、その役割には、貴重な植物の系統的保全活動だけでなく、それに関連する文化の継承、一般公開を通じての市民への啓蒙や教育的活動も含まれる。